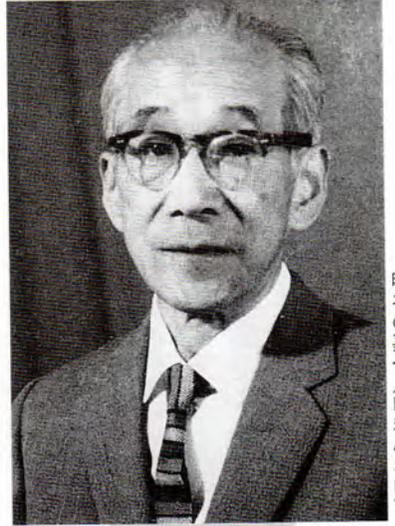


# 歌人探訪

晩年の嘉一（昭和45年頃）。



# 後井嘉一

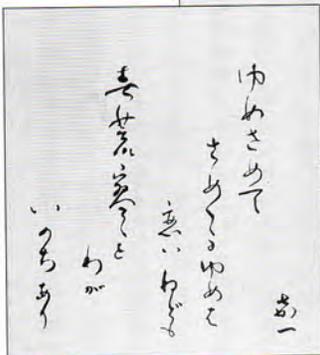
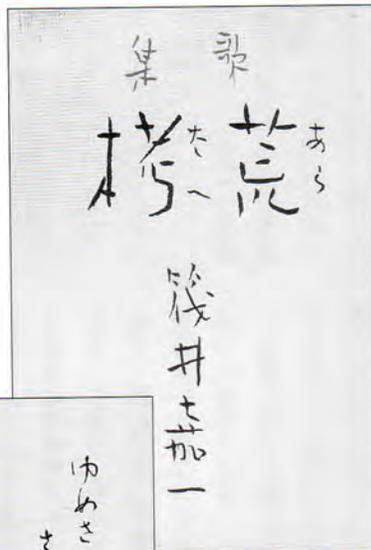
森比左志

## 序歌一首

夢さめてさめたる夢は恋はねども春荒寥  
とわがいのちあり

後井嘉一の代表作と謂われる歌。第一歌集『荒寥』の巻頭に据えた歌であり、故郷高岡市古城公園に建てられた歌碑に刻まれている歌であることなどからその代表歌として定説になったもの。句句布置の妙により一首の声調とこの愛誦したくなるような作品。「さめたる夢」は「恋はねども」と否定的ないいぶりに夢にのこる心根をのぞかせ、「わがいのち」「荒寥と」あることにつなぐ。荒寥は荒れはててさびしいさま、「春荒寥」でその季節感の風景に仮託して「わがいのち」ありと歌っているのである。上句、二つ重ねた「夢」を「さめて」「さめたる」と反転させ、下句の「荒寥」たる「いのち」と照応させている巧妙さ。

生命の深淵を歌った作とか、哲学的思惟を詠んだものという受容



第一歌集『荒寥』と直筆色紙。

もきいたが、むしろ庶民の夢、生についての卒直な感懐をのべたものといえまいか。後井嘉一は敢て難解な短歌を作っていない。『荒寥』の歌、どれも一読わかりやすく、だれにも親しめる作風が多い。『後井嘉一作品集』（創元文庫第七巻・昭和27年）のタイトルに添えて、

「庶民のこゑを、ありきたりの言葉で素直に表はしてゆきたい。」とその作歌信条を書き、同様のことをことあるごとに周囲の者たちに説いていた。筏井語録の中のこの一つは「夢さめて」の歌にのみ除外されるものではないといいたい。

### 筏井嘉一と歌集

筏井嘉一は『荒栲』と『籬雨莊雑歌』の二歌集をもつ。中学生十歳四歳の時から歌才がみとめられ、七十一歳で亡くなるまで半世紀をこえる歌歴のなかで二歌集はいかにも少い。創生短歌会では93年(平成・5)に筏井嘉一全歌集を編んだ。その際、この二歌集がかけがえない作品源であったことは勿論だが、二歌集のはざま、あとさきに詠まれ、歌集に入れのこされた短歌たち、それに『荒栲』以前の『籬雨莊雑歌』のあとの作品の蒐集に力を注ぎ、その全容を盛ることができた。

筏井嘉一は一八九九年十二月二十八日に生まれた。そのため二十世紀の年号の下二桁がその年齢となる。作歌をはじめたのが十三歳

### 籬雨莊雑歌 筏井嘉一

第二歌集『籬雨莊雑歌』。

(13・大正二年)  
『荒栲』刊行が四十歳(40・昭和十五年)というぐあい。創生(蒼生)創刊が同年で発行日を誕生日(12月28日)としているの

# 一 嘉 井 筏

ち、『籬雨莊雑歌』が六十五歳(65・昭和四十年)の刊。そして、七十一歳(71・昭和四十六年)に逝去した。

### 歌集『荒栲』について

昭和歌人叢書第一巻、収録五百首、A B C D E 五章にきちつと百首ずつの構成はみごと。自在無碍とみられていた筏井嘉一の己れに忠実で頑固に譲らない性格を示すもの。五章は年代と配列が逆で、Eの「村にて」にはじまり、A「相」にさかのぼる。その五章について歌集後記に、自分の生きてきた足跡に關らせつつ述べている。

●E―村にて 郷里で小学校代用教員を勤めた時(大正十・大正十三年)から上京、「日光」でその歌が白秋に推奨される。二十歳までの作。

●D―愛らしき猫 父を失ったのち東京に住み、昭和初頭の思想動揺期に遭い、三浦三崎に逃避した時期、二十七歳から三十歳過ぎ。

●C―深川の家「立春」創立に参加。三十七歳から四十歳。

●B―戦ひ 事変に遭遇しての作。「新風十人」(昭和十五年)の内「銃後百首」をそのまま採録。

●A―相 Cと同時期の歌。主として心象詠に、「新風十人」の「貧しき子たち」を採録。

この間、筏井嘉一は歌人協会賞(40・昭和十五年)を受けた。「日光」以来疎遠になっていた白秋から祝いの自筆半折を受け、また「利玄賞」を受け、木下利玄から自筆短冊をもらい、一二つを家宝として、「その前で一生歌を作りつけようと思ふ」と述べている。

『荒栲』の作品については、自ら「常凡未熟」とし、「この粗末な歌集でいくぎりつけ、もう一度あらためて出直さう」といい、「四十

の手習といふ諺がひしひしと身にこたへる」と結んでいる。謙虚さ  
を持前とする者の語ともいえるし、また、『荒栲』一卷の歌の庶民性  
をも示唆していることばともいえよう。しかし当時の歌壇では、こ  
の『荒栲』が世を風靡するまでの高評を得たものである。

歌集『荒栲』から五章の枠をはずして、モチーフによって歌を抄  
出してみたい。

〈子〉

寒夜には子を抱きすくめ寝ぬるわれ森の  
獣といづれかなしき

日の暮れは妻をむかへにひとり抱きひと  
り手をひき猿子橋まで

冬の家にのぞみ杳かなる兎のこゑやサイ  
タサイタサクラガサイタ

集中に多い子の歌。筏井嘉一は大の子煩悩であった。歌集『荒栲』  
の扉には、深川の家を玄関で二人のお子さんと写した写真を掲げて  
いる(55ページ掲載写真)。「ひとり手をひき」はマーちゃん(真弓  
さん)「ひとり抱き」はチーちゃん(千種さん)である。時世のきび  
しさを背景とした歌集に、幼い子の登場はあたたかさややさしさを  
漂わせるものとなっている。

〈児〉

浅草の隅に生くる子ら腹満たず唱歌うた  
はす声しはがれぬ

残飯のあたはらぬ日がかなしとて綴方に  
はそれだけを書きし

「唱歌うたはず」筏井先生は音楽専科の教員として勤めていた。

〈季〉

せめて春はこころ浮きうき花を尋め俗な  
らましを思ふのみにて

春

禪紅く川瀬に跳ねる童らを見れば歓喜に  
満ちしわが日は過ぎぬ

夏

見わたしは雲に薄の景色にて野ぞなつか  
しくわが憩らひぬ

秋

わが冬はさむきこころの糧としも太陽ひ  
とつ恋しかりけり

冬

『荒栲』との出会いから

学生だった私は、横浜第七有隣堂で新刊の歌集『荒栲』を求めた。  
昭和十五年(40)初秋、筏井嘉一の名は私の心に生涯刻まれること  
になった。柳田新太郎「短歌新聞」で、筏井嘉一「蒼生」創刊の記  
事を読み、おそるおそる入門(会)の願いを送った。以来、筏井嘉  
一を歌の師として、誌名は「定型律」「創生」と移って、その間三十  
年ひたすら従ってきた。71年(昭和四十六年)その師の歿後、なり  
ゆきにて「創生」の編集に関り、すでに四半世紀を越えた。感慨無  
量である。

「蒼生」に参加して間もなく、日曜日など深川の家に編集の手伝  
いに上った。そして、筏井嘉一の几帳面さというか、加減を許さな  
い性格、そのしごとぶりに接することがしばしばだった。『荒栲』の  
各章きっちり百首という歌集構成にそれは続くものでもあった。

「蒼生」に投稿されてくる歌、中のきたない歌稿は三十字詰「蒼生」原稿用紙に書き改める仕事を手伝った。「蒼生」誌の割付はまことに厳密なもので、一作家の作品をめくるページの次に亘ることは勿論、見開き右ページから左ページに跨ることも許されなかった。文章もページにきちつと詰めた。かたくななまでのその編集手法は当然刷り上りの誌面を美しくした。これは現在の「創生」編集にあやまず受け継がれているものだ。

筏井嘉一は自身の歌について納得のいくまで外部にも出さず、「蒼生」誌上の作ともしなかった。そのため、雑誌の発行がおくれ、時に主宰の歌を欠く号もあった。頑固なまでの几帳面さの裏面でもあった。あるとき、外の雑誌から新年の歌の依頼を受け断ったといっていた。秋ごろのこと、お正月になったつもりで作歌することは許されないという理由であった。



深川の家で、長女・真弓(右)、次女・千種と。(昭和15年)

戦後、疎開地の東北から帰ってきた筏井嘉一を中心に、「かがみ会」という連絡網で交流をはかっていた会員が新出発のための集会を開いた。新出発の誌名を「定型律」とした。戦争が終ると何事にも自由が叫ばれるだろう。そのとき、短歌は定型を守っていくのだという筏井嘉一の主張を活かしたものであった。

筏井嘉一のその性格その庶民的な生活につい

## 一 嘉 井 筏

て、知人である児童劇作家の小池タミ子さんからお聞きした。小池さんは浅草の小学校児童だったとき筏井先生に音楽の授業を受けたという。筏井先生は、戦時下、音楽唱歌といえど式歌とか軍歌などが多かったが、戦争の歌は歌わず、学芸会のステージでは、どんどんひやらら、どんひやららと村祭の歌をにぎやかに歌わせ子供たちは喜んだという。音楽担任の筏井先生はオールバックの髪に黒縁のまるい眼鏡をかけ、モダンな黒っぽい服の姿でピアノを弾いていたという。また、町なかで、筏井先生が下駄ばきで洗面器をかかえて銭湯に行くのに出会ったその庶民ぶりをも伝えてくれた。

### 「昔日の歌」のいり

『筏井嘉一全歌集』編纂の時、その短歌作品蒐集につき各方面に協力を求めていた。筏井家にもお願いをしていた。そこで、はからずも、筏井嘉一少年期の短歌をはじめ、自筆による歌稿を綴った手書き歌集二十余点がご息女筏井木実さんによって発見され提供された。中でも「昔日の歌」と自署した一冊には少年期の短歌が浄書され、早熟の少年歌人として認められていたその作品が全容をあらわしたのである。「昔日の歌」はB5判原稿用紙二つ折り、片面に二首、楷書で書かれ、小見出しに一首分とる几帳面な編集。三章に分れ、上巻は十四・十五・十六歳の作。中巻は十八歳の歌百二十首、下巻は十九歳から二十歳、計百十三首と記されている。

楳の木花をいつぱいつけてをりその下に  
雪がいまだ残れり

上

かがやかに麦の芽青しこの朝け力いつば  
いわれ背のびする

上

田を鋤きていたく疲れし馬ならむ野川の  
ほとり水を飲めるは

中

雪のふる街ゆく人はおのがじし雪つむ傘  
をかしげていそぐ

中

射水野の春のなごりのげんげ花こひしき  
方に咲きつづきたり

下

おのづからきみをいたはるこころ湧き夕  
満潮を聴けよといひぬ

下

「射水野」の歌は早くから口伝でに喧伝されてきた歌。この歌が作者自筆でたぐさんの相聞歌と並んでいたのである。「こひしき方」は甘いが咲きつづく「げんげ花」に活かされて佳詠である。故郷の古城公園に歌碑を建てたのは地元富山県や高岡市を中心とした人々の力によるものだったが、そのおり、地名が詠みこまれたこの

歌を歌碑にという意見もあったと聞いている。

### 『籬雨莊雑歌』について

古城公園歌碑前にて、とみ夫人と。左は父の句碑。(昭和40年)

『籬雨莊雑歌』は四十五歳(45・昭和二十年)から六十五歳(65・昭和四十年)の作を収め角川書店より刊行。翌年日本歌人クラブ賞を受賞した。俳人である父の篠井竹の門の

書による「籬雨莊」の額を掲げ、「あばら屋」の意をとって住居の名称とし、そこで書き散らした歌という意味の「雑歌」を添えたのが歌集名の由来である。

この歌集には、「運だとか、老だとか、また死ということに専ら関心がある」り、そうした歌の多いことに自ら言及している。

このごろの想ひはすべて「老」と「死」と「貧」にかかれり呪はしき三つ

「貧」に澄み「老」をたのしみ「死」にのぞむ大境涯われに到るや

わが死ぬはいつの日ならむをりをりにいたく気になるそのときの顔

こうした『籬雨莊雑歌』を特色づけている歌のほか、同じモチーフの作品を『荒栲』の歌と並べてみると、その思考の変化などがうかがえて興味ぶかい。引例歌、Aは『荒栲』の歌、Rは『籬雨莊雑歌』の歌である。

### ●歌

A ひたぶるのおもひをこむるわれの歌のひとつだにも世にひびきをつたへよ

R 苦しんで歌かいてそれが何になるなんにもならぬものもありてよき

### ●時

A 親子そろひ飯食ふ今をかへりみて幸なりきとおもふ日もあらむ

R 今日を在るわが運命をさかのぼりまたしてもおもふ「もしもあの時」

●戦い

A 貧しきはおのづから国のみちにそひおし黙りつつ生きてゐるものを

R 国敗れすでに十年の歳月の大き息つく生きのびしかば

●酒

A やるかたもなくつかれきてひとり酌むゆふべの酒を嬲しみとすや

R 寝そびれて夜半の厨に酒含む折からの雨の音聴きながら

●子

A 貧しきは今日も暇なく寝かすまで子の誕生日忘れりたりし

R いくさすみぬ今年は雛を祭れよと疎開先なる吾子にたよりす

●妻

A モナ・リザの微笑はわれのものならず口さへあきて妻の居睡る

## 一 嘉 井 筏

R 鬼婆と異名をとりし家妻がをりをり笑ふ腹をかかへて

●勤め

A 家へ帰るただそれだけがたのしみにてまた一日の勤めをはれり

R みじめなる先生ぐらしのちちははを子らよよく見て生き誤るな

推敲のこと

門下の者の詠草への朱ペンによる添削のていねいさには定評があったが、自作の推敲にもこだわっていた。『全歌集』には各誌紙に発表した歌を収録したが、その歌が歌集にのった時と比べてみると句の推敲のあとがみえて興深い。かつて「香蘭」に出詠していたとき、大きな活字で見開きに組まれていたが、その歌に推敲のペンが加えられているのを見たことがある。少年期らしい文字そのままの「昔日の歌」の原稿に、あきららかに後年の筆跡とわかるペンで推敲が施されている。これは字ばなければならぬ作歌の訓えである。終りに「絶詠」の内二首を抄出しておきたい。

このままに生きてかへると思はねども一度踏みたきわが家の敷居七十年生きしいのちの終点をただ安らかに眠らせたまへ

(もり・ひさし「創生」会員)